稚内日ロ経済交流協会について

札幌大学ロシア語卒九期生　伊藤　裕

ご承知のように、稚内市は日本の最北端の都市であり、その北にはサハリン島（かつての樺太）が位置しています。宗谷岬からサハリンのクリリオン岬（Мыс Крильон）までは最短で四三キロメートルの距離にあります。晴れた空気の澄んだ日には宗谷岬からクリリオン岬の丘にあるレーダー基地さえ望むことができますし、稚内公園からもサハリンの島影を遠望することができます。

日露戦争（一九〇四～一九〇五年）に勝利した日本はロシアからサハリンの南半分を割譲され日本領となりました。稚内港と樺太の大泊港（現コルサコフ市）の間には稚泊航路が就航し、多くの日本人が稚内港から樺太を目指してこの航路で行き来していました。南樺太の各地域には一九四五年の敗戦までピーク時には約四〇万人の日本人が居住し、特に漁業、炭鉱、林業、パルプ工業などで隆盛を極めていました。戦後ソ連時代には製紙産業はすっかり廃れましたが、今でも南サハリンの主要な都市にはかつての日本の製紙工場の遺物が残っており、かつて〈宝の島〉と呼ばれた面影を見ることができます。

現在のサハリンは、もちろん、漁業や炭鉱も主要な産業ではありますが、何よりも今はサハリン北東部（オホーツク海北部）での石油・天然ガスプロジェクトが最大の産業となっています。〈サハリン－1〉と〈サハリン－2〉プロジェクトが進展し、特に〈サハリン－2〉プロジェクトではコルサコフ市近郊のプリゴロドノエ村(село Пригородное)にロシアで最初のＬＮＧ（液化天然ガス）工場が建設され、現在多くのＬＮＧや石油が宗谷海峡を渡って日本へと運ばれています。今、新たな〈宝の島〉は稚内にとって切っても切れない関係にあります。

戦後長年に渡って稚内にとってサハリンは近くて遠い島でしたが、その節目が変わったのはやはり一九九一年のソ連邦崩壊後です。ソ連からロシアに変わった混乱期にサハリンからカニを積んだ船が稚内港へ入港するようになりました。そういった状況下で稚内市はサハリンとの今後の経済交流の拡大を見越して窓口となる事務局を創設することとし、一九九二年（平成四年）に稚内市役所の支援のもとに稚内市の民間会社を中心として稚内日ロ経済交流協会が発足しました。大学でロシア語を専攻し、前年より市民向けのロシア語講座の講師をしていた縁で協会の事務局職員として声がかかり、地元（豊富町）の民間企業を退職し、今の協会へ転職し、今年で協会での仕事も二九年目になります。

当初、協会での仕事はやはりカニ船の通訳とカニの輸入契約書の翻訳などが主でした。カニの選別や重量確認、その後の値決めの通訳としていろんな会社からお呼びがかかりました。通訳現場での実践を通してロシア語のボキャブラリーを増やすことに助けられました。いくつか例に挙げれば、カニの代表的名称でタラバガニ（Камчатский краб）、毛ガニ（Волосатый краб）、ズワイガニ（Краб-стригун）等、選別では活ガニ（Живой краб）、死ガニ（Уснувший краб）などです。年毎に増えていくロシア船のおかげでロシア人船員の病気や怪我等による病院、歯科医院での通訳、不法上陸や万引きなどで逮捕された

ロシア人船員の検察庁や裁判所での通訳なども増えていきました。中には殺人や傷害事件などの重大犯罪の事例もありました。

現在稚内港へのロシア船の入港隻数はカニの密漁・密輸防止対策の日ロ間の協議に基づいて稚内港へのサハリンからのカニ船の入港隻数は激減しています。最盛期には年に三千～四千隻を超えた年が何年もあり、上陸する船員の数も七万人を超え、ロシア人船員の市内での個人的な買い物、船の燃料、食料品、カニの鮮度を保つための氷、飲料水、その他もろもろの資材の稚内港での調達による消費額は年に数百億円という年もありました。ここ数年は年に百隻前後まで入港隻数は減っています。カニ資源の保護と密漁の根絶を目指してのことではありますが、稚内のカニバブルは完全に弾けた状況です。

稚内商工会議所もサハリンとの経済交流を見据えて一九九四年から毎年夏場にサハリンの姉妹都市（ネヴェリスク市、コルサコフ市、ユジノ・サハリンスク市）から研修生を受け入れています。日本語学習も含めての研修期間は四〇～五〇日間に及び、その期間日本語教育と受け入れ先企業での研修に同行しています。宗谷管内の自治体とサハリン側との交流通訳、商談等の通訳、付随する翻訳業務など、実践の場で多くの経験を積ませてもらっています。

三〇年近くに及ぶ実務経験のおかげで当初おぼつかなかったロシア語力もそれなりに通用するだけの力量がついたのではないかと自負しておりますが、これで良しとすることなく、***Век живи, век учись***（生きているかぎり学べ）を戒めにして今も日々辞書と格闘しています。

さてこの度札大露語卒の粕谷、村野両巨頭先輩より「水源地」への寄稿を依頼され、この拙文を書いております。同人誌「水源地」の名称を聞いて大学の近くにあった西岡水源地が思い出されます。おそらく両先輩は学生時代に西岡の地に居住し、かの地は両氏にとってのテリトリーで、そのノスタルジーから「水源地」を名称にしたのではないかと推察しております。残念ながら、自分は大学時代北ノ沢という藻岩山観光道路の麓に下宿していたので、一度も西岡水源地を訪れたことはありませんが、大学卒業後四〇数年を経過しても学生時代の鮮やかな思い出を同人誌の名称に両先輩は投影したのではないかと思っております。

新型コロナウイルス禍の猛威が早く終息し、元の生活に戻れることを祈念して筆を擱きます。